

テスト設計コンテスト OPEN クラス - アピールシート

※全体でA4縦 1 ページに収まるように記述してください。

地域名

東京

チーム ID

S270717002

チーム名(ふりがな)

TTP (てい・てい・ピー)

チーム紹介

私たちは、まず新しい手法を生み出すことにこだわるのではなく、当社で蓄積されてきたテスト分析・テスト設計・テスト技法・品質向上のノウハウを徹底的に活用してコンテストに挑戦します。

チーム名の「TTP」は「徹底的にパくる(良い取り組みをまずはマネをする)」の略ですが、その本質は「優れた実践を徹底的に学び、吸収し、成果につなげる」という決意を表します。

さらに、AI も積極的に活用しながら、既存の知見と新しい技術を組み合わせてコンテストに挑戦します。

「当社の先人の知見 × ノウハウ × AI 活用」——それが我々のTTPです。

コンセプト

サービス価値である密回避を守るため、「入場システムの変更点」及び「今回の変更点、今後の変更を見据えたリグレッションテスト」を重視し、説明可能な品質保証を実現するリスクベースドテスト設計を目指す。

コンセプトを支える3つの柱

柱①: サービス価値起点

機能検証ではなく、「密回避」「販売能力向上」「利用者サービス維持」をテスト目的とする

柱②: リスクベース

リスク分析を実施した結果、リスクレベルに応じたリソースを投入することによる効率的な品質向上

柱③: 説明可能な品質保証

要求から証跡までを追跡可能にし、「トレーサビリティ」「Observability」「品質説明責任」を実現

工夫点

1. サービス価値からのテスト観点の導出

仕様書に記載された機能や画面を起点にテスト対象を整理するのではなく、「なぜこのシステム変更が行われるのか」「失敗すると誰が困るのか」を最初に整理した。特に V03 では販売能力と入場能力の拡大が求められる一方で、安全性や混雑回避も維持しなければならぬため、利便性向上と安全性確保の両立が重要な課題だと考えた。

そのため、機能分析より先に事業目標、ステークホルダー、サービス価値を整理し、その結果からリスク(29 個)やテスト観点(20 個)を導出した。テスト観点ごとに「誰のために何を守るテストなのか」を説明できる状態を目指した。

2. 個別機能ではなく、構造変化に着目したリスク分析の実施

V03 では入場人数の拡大やゲート構成の変更があるが、それぞれを個別機能として分析すると全体の問題が見えにくくなると考えた。そこで変更点を整理した結果、本質的な変化は複数システムが時刻・残数・入場券状態を分散管理する構造に変わることであると捉えた。そのため機能ごとの不具合ではなく、システム間の整合性や同期制御に起因する問題を重点的に分析した。

結果として、超過販売、誤った入場判定、残数不整合など、事業目標に大きな影響を与えるリスクを明確にすることができた。

3. リスクレベル判定によりテストの厚み付けを定義し、工数配分の根拠を明確化

限られた工数で効果的なテストを行うため、抽出したリスクをそのまま並べるのではなく、影響度や発生可能性を用いて評価を実施した。また、評価結果の高いリスクについては個別に扱うのではなく、根本原因の共通性を分析し、重点リスク群として再整理した。その結果、最重要であるリスクレベルが高い案件へリソースを集中させる方針を決定した。

どの機能も同じように確認するのではなく、「どこで失敗すると事業影響が大きいのか」を基準に優先順位付けを行った点が本成果物の工夫である。

4. トレーサビリティ重視

分析結果が単なる考察資料にならないよう、サービス価値からテスト観点まで追跡できるトレーサビリティマトリクスを構築した。ステークホルダー、業務課題、リスク、重点リスク群、テスト観点を共通の識別子で管理し、「なぜこのテストが必要なのか」を後から確認できるようにした。

また、後続工程であるテストアーキテクチャ設計やテストケース設計でも同じ識別子を利用できるようにすることで、要求との対応関係を継続的に確認できる構成とした。